

原 著

## 入試・コースと学内成績の相関に見る教育学科の動向

小 松 俊 朗

### 概 要

神戸女子大学の2006年度～2009年度入学の教育学科全学生について、入試区分別、小学校・幼児教育・心理学のコース所属および入学後の学内での成績との関係を調査して検討した。その結果、次のようなことが明らかになった：推薦入試入学生は幼児教育コースを選択する学生が多く、一般入試入学生は小学校教育コースが多い；入試区分による小学校・幼稚園の教員採用試験の合格率に有意な差はない；一般入試入学生と推薦入試入学生の学内成績を比べると、一般入試入学生の方が順位が高い範囲に分布している；小学校教採合格者の50%は学内成績が60位以内であり、合格者の70～80%は学内成績が100位以内である；2008年度から小学校コースの選択が減少し、その減少分が幼児教育と心理学コースに半々の割合で移っている。この傾向は今後も続くことが確実で、保育士資格認定枠から溢れる学生が増加することへの対応を迫られている。

### 1 はじめに

現在、わが国の大学が直面している問題として18歳人口の減少、学生獲得競争の激化、定員割れ大学の増加といったことがあることは改めて記すまでもない。本学においても各部門での様々な取り組みによりこの潮流を乗り切るべく努力を続けているところである。中でも、本学教育学科は所属する文学部5学科の中において、文学部在学生の半分を抱えており、大学生き残りの浮沈の鍵を握っている学科である。教育学科の充実発展あるいは衰退は、そのまま神戸女子大学が生き残れるか否かに直結していると言えよう。幸い、学生数の面では現状は大学経営を支えている数を保っているが、最近、近隣大学において小学校教諭免許を取得できる学科の増設が認可され、その影響も懸念されることとなっている。このような状況において本学教育学科はどうあるべきかを検討し、対応していく必要がある。

教育学科は小学校教育・幼児教育・心理学の3コースで構成されるが、幼児教育コースの保育士資格定員80名を除いては自由にコースを選択できることとなっているため、特にコース定員を定めていない。近年の幼保一元化の政策もあり、幼児教育コースを志望する学生は殆どが保育士資格取得を希望するが、定員を超える人数は希望が叶えられないという問題を抱えている。したがって、学生のコース選択状況の実情を把握し、今後の動向を予測して、出来るだけ学生の希望が叶えられるような施策

が望まれよう。また、小学校教育コースでは上述のように兵庫県下の諸大学で競合校が増えることとなった。今後の教員採用試験合格率に反映してくることは確実で、他校にはない独自の魅力あるプログラムで教員養成を実践して成果を挙げ、受験生を集めていかねばならない。コースとして重大な局面に置かれている認識が求められている。

上記のような学科が直面する問題に対処していくためには、まず学生の学業状況を調査し検討する必要がある。そこで本稿では、入試区分・所属コースと学内成績との相関を調べることによって教育学科の現状を把握し、今後の動向を探ることを試みた結果を報告する。

## 2 調査期間と方法

2006年度～2009年度入学の教育学科全学生について、入試区分別、小学校・幼児教育・心理学のコース所属および入学後の学内での成績との関係を調査して検討する。本学の入試方式は大別すると表1のように区分される。今回の分析では、区分1に「公募制推薦入試・自己推薦方式・神女ファミリー方式」を「推薦」として扱い、区分2で「指定校・AO・推薦」を「全推薦」に、「一般・センター」を「全一般」にまとめて区分することとした。また、このほかに3年次編入試験が実施されており、今回の調査では2006・2007年度生に在籍している編入生が対象となっている。

表1 神戸女子大学の入試方式

入 試 方 式	区分1	区分2
指定校特別推薦入試	指定校	全 推 薦
AO 入試(2007 年度から)	AO	
公募制推薦入試	推 薦	
公募制推薦入試自己推薦方式		
推薦入試神女ファミリー方式		
一般入試	一般	全 一 般
大学入試センター試験利用入試	センター	

入学後の成績については、2009年度後期試験までを調査対象とした。したがって、2006年度入学生については卒業時の成績、2007・2008・2009年度入学生についてはそれぞれ3年・2年・1年後期試験までの成績データ（平均点・順位・受講科目数など）を用いた。

当該期間での教育学科在籍のコース別人数は表2の通りである。各群（入試区分・コース）毎の学内成績の平均点や順位の分布を調べて、各群間の有意差や経年変化の動向を検討する。

## 3 結 果

### 3.1 入試区分とコース

入学試験区分によってコース選択に何らかの傾向があるかどうかを調べるために、試験区分別に学

表 2 教育学科コース別学生数

学生数	2006 年度生	2007 年度生	2008 年度生	2009 年度生
幼児教育	85	88	85	108
小学校	99	110	98	98
心理学	8	5	13	22
編 入	13	9		
退 学	2	8	4	1
計	207	220	200	229

生のコース人数を入学年度生毎にまとめた（表 3）。

表 3 では、次のような傾向が見られることが分かる。

- 指定校推薦で入学した学生は2006年度は幼児教育と小学校コースの比率がおおよそ 2 対 1 だったのが、2008年度ではほぼ同数になり、2009年度には 3 対 4 と逆転している。
- AO 入試については、導入された2007年度では幼児教育・小学校コースとも同様であったが、2008年度からはほとんど幼児教育コースを選択している。
- 推薦入試で入学した学生は2006～2008年度では幼児教育と小学校コースの間にほとんど差は見られないが、2009年度では推薦入学者の52％が幼児教育コースで、小学校コースは41％と減少している。また、心理学コースは2007年度まで選択する学生はほとんどなかったが、2008・2009年度には 6 %程度が選択している。
- 一般入試で入学した学生は2007年度までは60％強が小学校コース、35％が幼児教育、 5 %が心理学コースを選択しているが、2008年度から小学校コースが減少し、その減少分が幼児教育と心理学コースに半々の割合で移っている。
- 大学入試センター利用入試で入学した学生は、2006年度を除けば小学校コースを選択する学生が主である。

表 3 をもとにグラフを作成したものを図 1 と図 2 に示す。図 1 は推薦入学者のコース人数の入学年度ごとの変動を表し、左上図が指定校推薦による入学生を、左下図が区分 1（表 1 参照）による推薦入試での入学生を、そして右図が区分 2 の全推薦入試による入学生のコース人数を表している。図 2 は一般入試と大学入試センター利用入試を併せた全一般入試による入学生のコース人数を表している。

図 1 の全推薦入学生のコース別人数を見ると、2008年度生を除いては幼児教育コースを選択する学生が多いことが分かる。さらに、図 1 の左右の図を比較すると、2008年度生までは指定校推薦による入学生のコース選択の動向が反映しており、指定校以外の推薦入学生の幼児教育と小学校コースの選択に偏りは見られない。しかし、2009年度生になると、指定校推薦入学生のコース選択数が逆転して小学校コースが増加しているにも関わらず、指定校以外の推薦入学生の幼児教育コース選択数が大きく増えたため推薦入試による入学生は幼児教育コースの選択が多いという傾向を示している。

一方、一般入試による入学生については図 2 で2008年度までと2009年度とで大きな変化の兆候が見

表 3 試験区分別のコース人数

指定	2006 年生	2007 年生	2008 年生	2009 年生
幼児教育	20	18	14	12
小学校	11	12	15	16
心理学	3	0	0	3
計	34	30	29	31

AO	2006 年生	2007 年生	2008 年生	2009 年生
幼児教育	—	3	3	4
小学校	—	2	1	0
心理学	—	0	1	0
計	—	5	5	4

推薦	2006 年生	2007 年生	2008 年生	2009 年生
幼児教育	29	35	41	46
小学校	27	38	41	36
心理学	0	1	5	6
計	56	74	87	88

一般	2006 年生	2007 年生	2008 年生	2009 年生
幼児教育	32	31	26	45
小学校	58	54	37	42
心理学	4	4	6	13
計	94	89	69	100

センター	2006 年生	2007 年生	2008 年生	2009 年生
幼児教育	4	1	1	1
小学校	3	4	4	4
心理学	1	0	1	0
計	8	5	6	5

られる。2008年度までは約60%が小学校コースを選択し、幼児教育コースは35%、そして5%が心理学コースを選択するという傾向だったのが、2009年度になって小学校と幼児教育コースを選択した学生がそれぞれ44%で、心理学コースを選択した学生が12%となっている。表1で示されるように、小学校コースの学生数はほぼ100名となっているが、学生数に対する相対比率で見ると減少しているという結果である。

### 3.2 入試区分と学内成績

入学試験区分によって学内成績に差があるかどうかを調べるために、試験区分別に学生の成績（平均点）分布を検討する。図3～図6は全推薦・全一般・編入の各入試区分で分類した学生の平均点を2点間隔に度数分布を求めて図示したものである。一見したところ、一般入試入学生の方が推薦入試

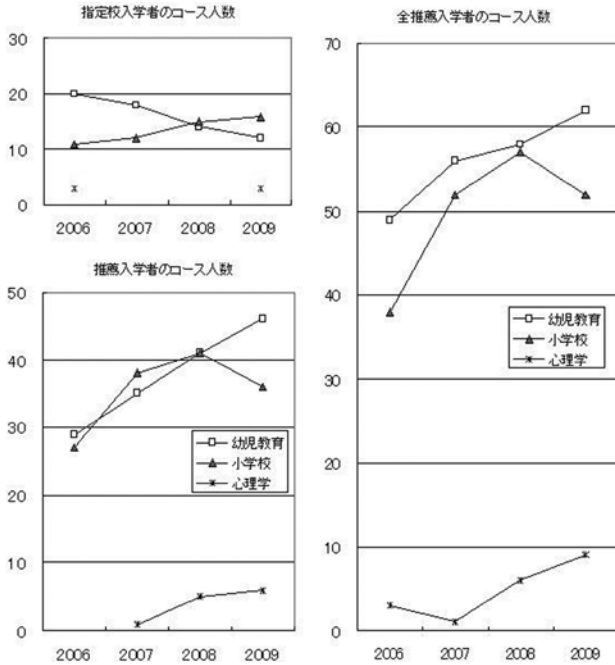


図1 推薦入試入学者の入学年度別コース人数

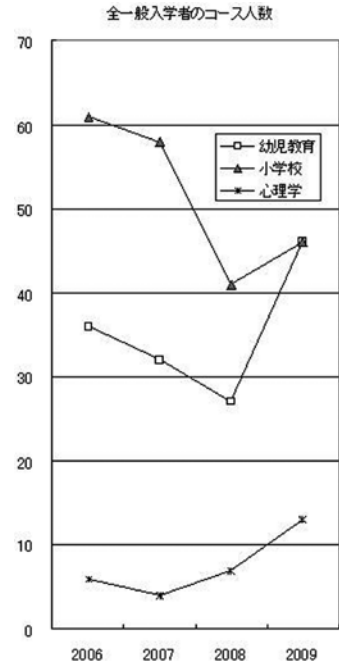


図2 一般入試入学者の入学年度別コース人数

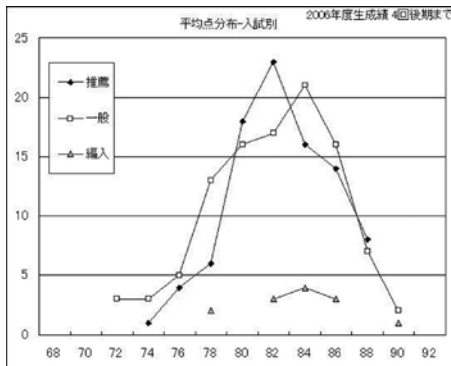


図3 平均点分布入試別 (2006年度生)

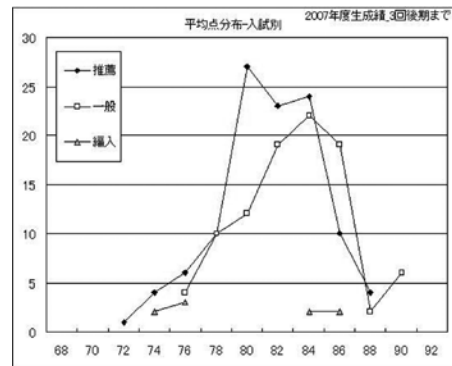


図4 平均点分布入試別 (2007年度生)

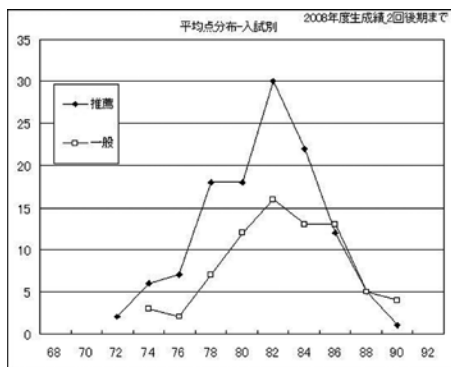


図5 平均点分布入試別 (2008年度生)

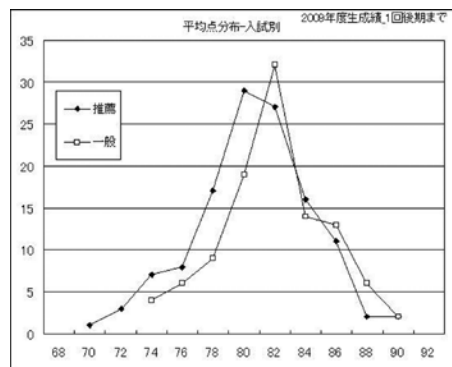


図6 平均点分布入試別 (2009年度生)

入学生より平均点が高いことがすべての年度に共通しているようである。そこで、全推薦と全一般の分布の平均値に有意な差があるかどうかの検定をした。(以下では全推薦・全一般をそれぞれ推薦・一般と記す)

編入生は数が少ないので検定の対象から除外し、推薦入試入学生と一般入試入学生の学内成績の平均点分布において平均値に差がないという帰無仮説に対して検定を行う。それぞれの分布における平均と分散の値を表4に示される。そして Welch の方法による t- 検定で平均値の差の検定を行った結果が表5である。

表5において「 $P(T \leq t)$  両側」は、帰無仮説が正しいにもかかわらず誤って帰無仮説が棄却される確率を表している。すなわち、2007～2009年度生については  $1 - 0.01$  でおよそ99%の確率で平均値に差があるということになる。2006年度生については、図3のグラフでは一般入試入学生と推薦入試入学生のピーク点が明らかにずれているように見えるが、検定による有意差はない。

次に、成績順位においてはどのような分布となっているかを、箱ヒゲ図を用いて入試区分別に調べてみる。箱ヒゲ図は四分位グラフとも呼ばれ、データを小さい順に並べて、下から1/4のところのデータを「25%点」、2/4のところを「中央値」、3/4のところを「75%点」として箱を描き、25%点から「最小値」と75%点から「最大値」へ「ヒゲ」を伸ばして描いたものである(図7)。データの分布で中心の位置とばらつきの様子を表し、グループによるばらつきの違いを簡単に比較することが出来る。成績の順位を入試区分別にグループ化して箱ヒゲ図で表すと図8のようになる。このデータに対してマン・ホイットニーの U 検定を行った結果が表6である。

表4 推薦・一般入学生の学内成績(平均点)の平均と分散

入 試 別		2006 年生	2007 年生	2008 年生	2009 年生
平 均	推 薦	81.5	80.5	80.3	79.6
	一 般	81.2	82.0	81.8	80.9
分 散	推 薦	9.9	11.2	13.4	14.0
	一 般	14.4	11.2	14.9	12.6
データ数	推 薦	90	109	121	123
	一 般	102	94	75	105

表5 推薦・一般入学生の学内成績(平均点)の平均値の差の検定

入 試 別	2006 年生	2007 年生	2008 年生	2009 年生
自 由 度	189	197	151	223
t 値	0.76	-3.03	-2.67	-2.71
$P(T \leq t)$ 両側	0.45	0.003	0.01	0.01
t 境界値 両側	1.97	1.97	1.98	1.97

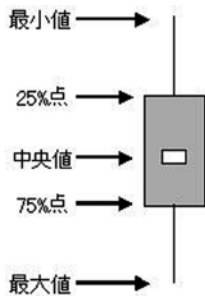


図7 箱ひげ図

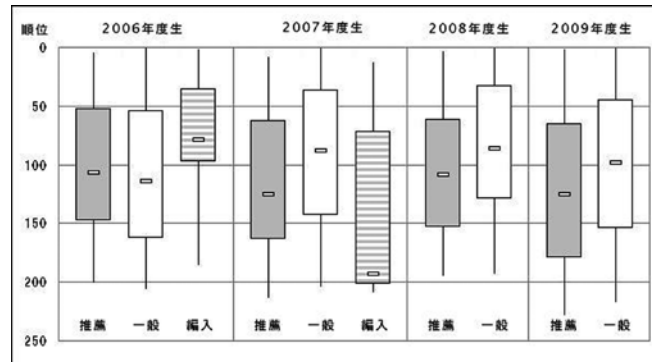


図8 入試区分別の成績順位分布

表6 入試区分別の成績順位分布に対する順位和検定 (\*\*= $p<.01$ , \*= $p<.05$ )

入学年度	入 試	人数	検定統計量	期待値	分 散	検定統計量	有意確率 $p$ (両側)
2006 年生	推 薦	90	4374.50	4635.00	149826.60	0.672997	0.5009491 n.s.
	一 般	103					
2007 年生	推 薦	109	3990.00	5123.00	174144.02	2.715036	0.0066269 **
	一 般	94					
2008 年生	推 薦	121	3594.00	4537.50	148954.78	2.444639	0.0144997 *
	一 般	75					
2009 年生	推 薦	123	5229.00	6457.50	246406.10	2.474853	0.0133291 *
	一 般	105					

平均点についての有意差検定の結果からも当然のことであるが、図8においても2007～2009年度生については推薦入試入学生より一般入試入学生の方が順位が高い範囲に分布し、中央値もはっきりとした差が見られる。順位和検定からも2006年度生以外は有意差があることが示された。

以上のことから、一般入試入学生と推薦入試入学生の学内成績を比べると、前者のほうが成績がよいと言える。

### 3.3 コースと学内成績

教育学科の3つのコース（小学校・幼児教育・心理学）に所属する学生間に成績の偏りがあるかどうかを調べるために、コース別に学生の成績（平均点）分布を検討する。図9～図12は各コースで分類した学生の平均点を2点間隔に度数分布を求めて図示したものである。

図10の2007年度生の小学校と幼児教育コースの分布において、小学校コースに平均点の高い学生が多いことが見られる。しかし、表7と表8で示される小学校と幼児教育コースの平均値の差の検定結果によると、 $P(T \leq t)$  両側値は0.07であり、通常は5%水準、すなわち95%以上の確率の場合に有意差ありと考えるので、有意差があるとは言えないことになる。

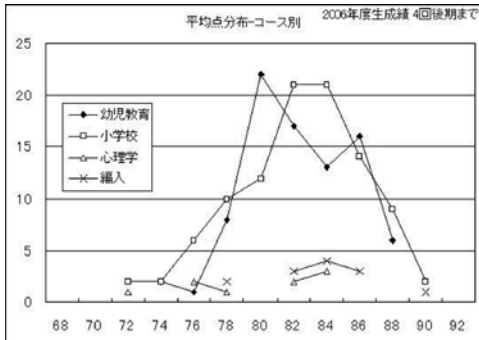


図9 コース別平均点分布 (2006年度生)

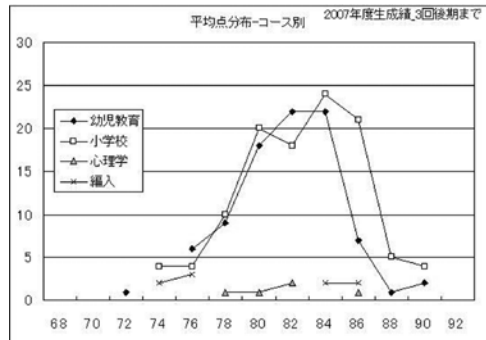


図10 コース別平均点分布 (2007年度生)

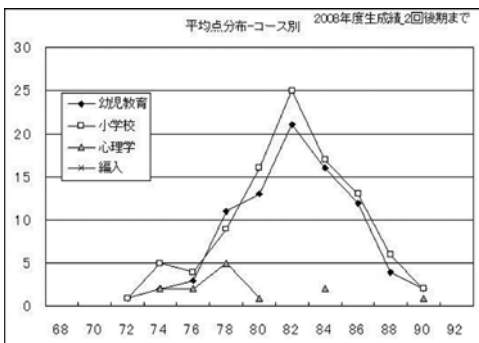


図11 コース別平均点分布 (2008年度生)

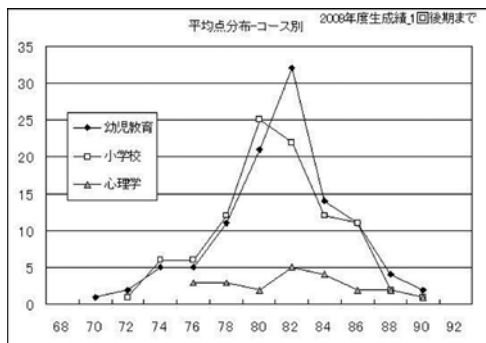


図12 コース別平均点分布 (2009年度生)

表7 小学校・幼児教育コース学生の学内成績(平均点)の平均と分散

コース別		2006年生	2007年生	2008年生	2009年生
平均	小学校	81.4	81.6	81.1	79.9
	幼児教育	81.4	80.7	81.1	80.3
分散	小学校	13.9	13.2	14.0	12.6
	幼児教育	10.7	9.9	12.6	14.0
データ数	小学校	99	110	98	98
	幼児教育	85	88	85	108

表8 小学校・幼児教育コース学生の学内成績(平均点)の平均値の差の検定

コース別	2006年生	2007年生	2008年生	2009年生
自由度	182	195	180	204
t 値	-0.05	1.83	-0.09	-0.76
P(T<=t) 両側	0.96	0.07	0.93	0.45
t 境界値 両側	1.97	1.97	1.97	1.97



次に、成績順位の分布を箱ヒゲ図で示したものが図13である。また小学校・幼児教育コース学生間に順位と検定を行った結果が表 9 である。これらの結果から次のような傾向が見られることが分かる。

- 小学校と幼児教育コースでは、2007年度は小学校コースの方が順位が高い学生が多いが、他の年度はほとんど同じ分布を示している。
- 心理学コースでは、2006～2008年度は他の2コースと比べると順位が低い方に分布しているが、2009年度は図12でも明らかなように幅広く分布している。心理学コースは学生数が他のコースより少ないため統計値をそのまま比較することは出来ないが、2009年度は学生数が22名に増えたことが要因であろう。

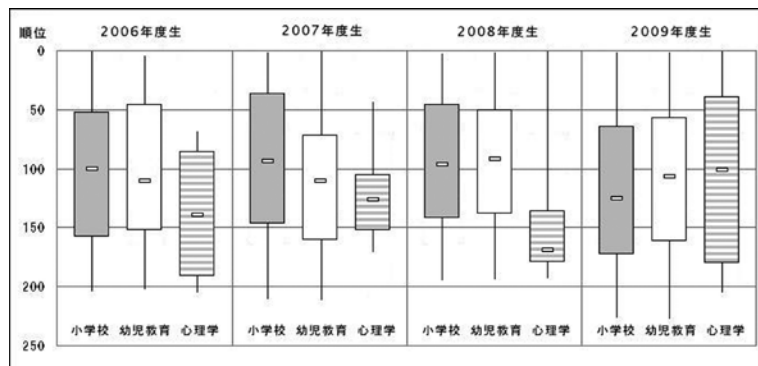


図13 コース別の成績順位分布

表 9 小学校・幼児教育コース学生の学内成績の順位と検定

入学年度	コース	人数	検定統計量	期待値	分散	検定統計量	有意確率 p(両側)
2006 年生	小学校	99	4134.50	4207.50	129695.76	0.202703	0.8393673 n.s.
	幼児教育	85					
2007 年生	小学校	110	4011.50	4840.00	160491.18	2.068078	0.0386327 *
	幼児教育	88					
2008 年生	小学校	98	4130.00	4165.00	127700.66	0.097943	0.9219779 n.s.
	幼児教育	85					
2009 年生	小学校	98	4847.00	5292.00	182525.13	1.041595	0.2975997 n.s.
	幼児教育	108					

履修状況にコース及び学年進行上で偏りがないかを調べるために、コース別の履修科目数の平均をまとめた(表10・11)。表から次のような傾向が見られることが分かる。

- 2006年度生に比べると2007年度生以降の履修科目数が減少している。1回前後期は大きな差はないが、2・3回では合計すると6.7科目も少なくなっている。

- 学年進行と履修科目数については、3回後期から少なくなり、4回生になると週に5科目程度で、小学校コースは卒業論文を含めても2.7科目しかない。
- コース間でみると、2006年度生の4回後期までの受講科目数の平均は小学校・幼児教育がそれぞれ91.1と91.9ではほぼ同じであるが、心理学コースは81.7で10科目も少ない。
- 編入生については、4回後期以外は他の学生より週2～4科目多い状況である。

表10 コース別の履修科目数の平均（学期毎）

## 2006年度生

平均科目数	幼児教育	小学校	心理学	編入	全体
1回前期	15.7	15.7	14.1		15.6
1回後期	12.9	13.8	10.9		13.3
2回前期	15.8	16.9	12.9		16.2
2回後期	13.2	14.1	12.6		13.6
3回前期	13.5	13.2	12.3	14.6	14.3
3回後期	9.6	9.9	10.8	12.5	10.7
4回前期	5.4	4.7	4.4	6.6	5.1
4回後期	5.8	2.7	3.7	2.6	4.0

## 2007年度生

平均科目数	幼児教育	小学校	心理学	編入	全体
1回前期	15.7	15.9	15.2		15.8
1回後期	12.2	13.6	12.8		13.0
2回前期	14.3	15.0	13.0		14.6
2回後期	10.5	12.3	11.8		11.5
3回前期	12.2	12.1	11.8	14.0	12.8
3回後期	9.1	8.1	9.6	12.4	9.1

## 2008年度生

平均科目数	幼児教育	小学校	心理学	編入	全体
1回前期	14.2	13.7	13.9		13.9
1回後期	14.2	14.8	14.2		14.5
2回前期	14.3	15.0	14.2		14.6
2回後期	10.7	11.7	11.5		11.2

## 2009年度生

平均科目数	幼児教育	小学校	心理学	編入	全体
1回前期	14.8	14.3	14.0		14.5
1回後期	14.9	15.2	15.2		15.0

表11 コース別の履修科目数の平均（学年毎）

## 2006年度生

平均科目数	幼児教育	小学校	心理学	編入	全体
1回	28.6	29.5	25.0		28.9
2回	29.0	31.0	25.4		29.8
3回	23.1	23.2	23.1	27.1	25.0
4回	11.2	7.5	8.1	9.2	9.2

## 2007年度生

平均科目数	幼児教育	小学校	心理学	編入	全体
1回	27.9	29.5	28.0		28.8
2回	24.8	27.3	24.8		26.2
3回	21.3	20.2	21.4	26.4	21.9

## 2008年度生

平均科目数	幼児教育	小学校	心理学	編入	全体
1回	28.4	28.5	28.1		28.4
2回	24.9	26.7	25.7		25.9

## 2009年度生

平均科目数	幼児教育	小学校	心理学	編入	全体
1回	29.7	29.5	29.2		29.6

### 3.4 教採合格者と成績

教員採用試験（教採）合格者の学内成績を調べてみるために実合格者（複数合格も1と数える）を対象として2006年度生のデータを前年度と比較してみた。まず、入試区分による小学校教採合格者数をまとめたのが表12である。2006年度生は指定校推薦入試による入学生の合格率が高いが、（指定校を含めた）推薦入試と（センター利用を含めた）一般入試を比べると、表3で示したように推薦入試入学生90名のうち42%の38名が小学校コースに属し、その26%の10名が教採に合格している。一般入試入学生については103名のうち59%の61名が小学校コースに属し、その34%の21名が教採に合格という結果であった。つまり、2006年度生については推薦・一般入試による入学生の合格率はいずれも30%前後である。この結果を2005年度と比べてみると、推薦入試入学生の合格率は29%で同様の傾向であるが、一般入試入学生の合格率43%からの減少傾向は懸念される。

表12 小学校教採合格者の入試区分

入試区分	2005年度生			2006年度生		
	コース人数	教採合格数	合格率	コース人数	教採合格数	合格率
指定	12	1	0.08	11	5	0.45
推薦	29	11	0.38	27	5	0.19
一般	55	24	0.44	58	19	0.33
センター	5	2	0.40	3	2	0.67
編入	18	5	0.28	13	0	0.00
計	119	43	0.36	112	31	0.28

表13は幼稚園採用試験実合格者について調べたものである。表中の「公幼」は公立幼稚園合格を、「私幼」は私立幼稚園合格を表し、いずれも臨時採用を含む。「(編入)」は表10と重複のため合計の算出から除外したことを意味している。2005年度に比べると2006年度生の合格数が半分以上に減少している。これは、2006年度生から保育士資格が取得できるようになったため保育所に34名就職しており、その数を考慮するとほとんど変わりはない。入試区分との関係は、推薦入試入学生の合格率が幾分高いようであるが、入試区分による差はないと言ってよいであろう。

表13 幼稚園合格者の入試区分

入試区分	2005年度生					2006年度生				
	コース人数	公幼	私幼	計	合格率	コース人数	公幼	私幼	計	合格率
指定	18	5	5	10	0.56	20	1	4	5	0.25
推薦	38	6	16	22	0.58	29	2	8	10	0.34
一般	30	4	12	16	0.53	32	3	5	8	0.25
センター	3	1	1	2	0.67	4	0	1	1	0.25
(編入)	18	1	2	3	0.17	13	0	0	0	0.00
計	89	17	36	53	0.60	85	6	18	24	0.28

次に、2006年度生の教採合格者が学内ではどのような成績であったのかを追跡してみた。図14は小学校の教採合格者の各学期での成績順位変化を示したものである。比較のために左側に2005年度生の小学校の教採合格者の卒業時順位を図示した（2005年度以前の学生については本学電算システム改訂の都合で総合成績しか入手できない）。順位は学年全体でのものである。この図から次のような傾向が見られることが分かる。

- 右図で学期毎の順位変化を見ると、第2学年で成績を上げている学生が顕著である。
  - 当然のことながら成績上位に合格者が多いが、下位であっても合格者は出ている。
  - 2005・2006年度生の結果を見ると、本学で80位以内が合格可能性の目安となるようである。
- そこで、表14で示すように順位の累積を調べると、2005・2006年度生を通して次のことが言える。
- 合格者の50%は学内成績が60位以内である。
  - 合格者の70%（2005年度生では80%）は学内成績が100位以内である。

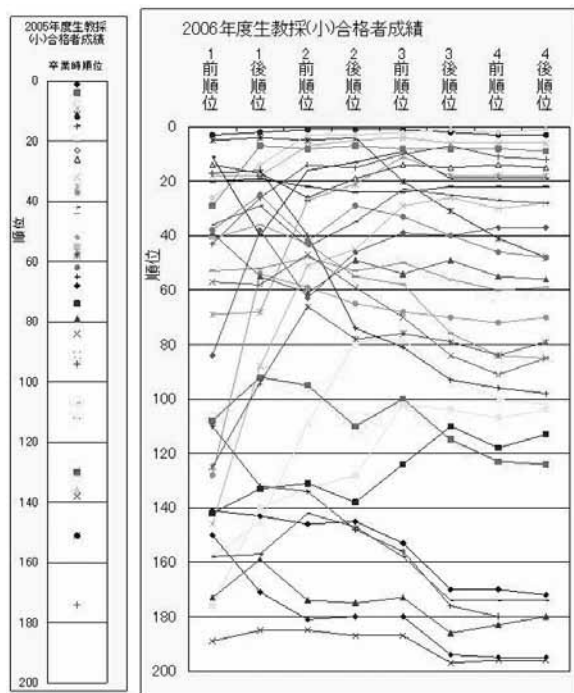


図14 教採合格者（小学校）の成績順位

表14 教採合格者の（小学校）の成績順位と累積

2005年度生						2006年度生					
No.	順位	累積%	No.	順位	累積%	No.	順位	累積%	No.	順位	累積%
1	1	2%	31	84	72%	1	1	3%	2	3	6%
2	4	5%	32	91	74%	2	3	6%	3	6	10%
3	6	7%	33	91	77%	3	6	10%	4	9	13%
4	9	9%	34	94	79%	4	9	13%	5	12	16%
5	11	12%	35	107	81%	5	12	16%	6	15	19%
6	12	14%	36	112	84%	6	15	19%	7	18	23%
7	15	16%	37	112	86%	7	18	23%	8	19	26%
8	15	19%	38	130	88%	8	19	26%	9	22	29%
9	20	21%	39	136	91%	9	22	29%	10	28	32%
10	23	23%	40	138	93%	10	28	32%	11	28	35%
11	26	26%	41	151	95%	11	28	35%	12	37	39%
12	26	28%	42	151	98%	12	37	39%	13	48	42%
13	32	30%	43	174	100%	13	48	42%	14	48	45%
14	35	33%				14	48	45%	15	56	48%
15	37	35%				15	56	48%	16	59	52%
16	42	37%				16	59	52%	17	70	55%
17	42	40%				17	70	55%	18	79	58%
18	44	42%				18	79	58%	19	85	61%
19	52	44%				19	85	61%	20	85	65%
20	55	47%				20	85	65%	21	98	68%
21	57	49%				21	98	68%	22	102	71%
22	58	51%				22	102	71%	23	104	74%
23	58	53%				23	104	74%	24	113	77%
24	62	56%				24	113	77%	25	124	81%
25	65	58%				25	124	81%	26	172	84%
26	68	60%				26	172	84%	27	174	87%
27	68	63%				27	174	87%	28	180	90%
28	68	65%				28	180	90%	29	180	94%
29	74	67%				29	180	94%	30	195	97%
30	79	70%				30	195	97%	31	196	100%

図15と表15は幼稚園の合格者について調べたものである。図を一見して分かることは、幼稚園の合格状況と成績の相関は小さいことである。表15の数字を見ても、2005・2006年度生とも成績の上位半分（100位以内）の合格数はほぼ50%となっている。図中に「公幼本」とあるのは公立幼稚園本採用を意味している。幼稚園の採用の場合はピアノなどの実技や面接が重視される傾向にあると聞くので、成績の相関が小さいことは理解できるが、公立の場合には採用試験が実施されることから公立本採用の順位を図中に示した。図で分かるように、「学内成績が高いから公立に合格している」という結果ではない。

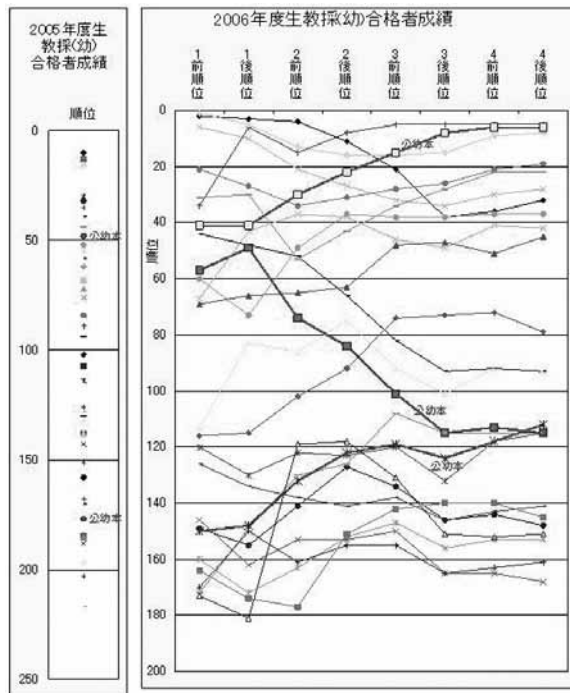


図15 教採合格者（幼稚園）の成績順位

表15 教採合格者の（幼稚園）の成績順位と累積

2005年度生			2006年度生		
No.	順位	累積%	No.	順位	累積%
1	10	2%	31	107	58%
2	13	4%	32	114	60%
3	15	6%	33	116	62%
4	15	8%	34	126	64%
5	30	9%	35	128	66%
6	32	11%	36	130	68%
7	35	13%	37	132	70%
8	39	15%	38	138	72%
9	44	17%	39	138	74%
10	46	19%	40	143	75%
11	48	21%	41	151	77%
12	48	23%	42	158	79%
13	48	25%	43	168	81%
14	48	26%	44	170	83%
15	52	28%	45	177	85%
16	55	30%	46	184	87%
17	58	32%	47	185	89%
18	62	34%	48	185	91%
19	62	36%	49	188	92%
20	68	38%	50	194	94%
21	72	40%	51	197	96%
22	76	42%	52	203	98%
23	84	43%	53	217	100%
24	84	45%			
25	89	47%			
26	94	49%			
27	94	51%			
28	102	53%			
29	107	55%			
30	107	57%			

### 3.5 資格取得状況

教育学科の主な取得資格は、小学校・幼稚園教諭1種免許、保育士資格、認定心理士資格である。幼児教育コースでは80名の保育士資格と幼稚園教諭（小学校教諭も可）、小学校コースでは小学校・幼稚園教諭、心理学コースでは認定心理士資格と小学校・幼稚園教諭の取得を推奨している。保育士資格を取得する学生に対しては小学校教諭取得も可能ではあるが、幼稚園や保育所の現場では「幼保一元化」の政策があることと、併せて小学校の免許のための必修科目を受講すると授業数の負担が大変大きいこと、そのためにかえって学習密度が薄くなってしまいう要因となることなどの理由から推奨はしていない。

2006年度生について上記資格の取得状況をまとめたのが表16である。この年度生は保育士資格が取得できるようになった第1期生であるが、保育士資格を取得したものは76名で、5%に当たる4名が取得していない。また、注目すべきは保育士資格を取得したうちの24%に当たる18名が小学校教諭免許を取得していることである。幼児教育コースにおけるオリエンテーションではむしろ幼・保に絞って専門を深く学習することを推奨しているにも関わらず、保育士課程に属する学生のうちほぼ4人に1人は小・幼・保の3資格を取得している。それだけ学生の希望が強いことの表れであろう。

小学校コースでは全員が小学校教諭免許を取得しており、83%が幼稚園教諭免許も取得している。そして心理学コースでは認定心理士資格だけを取得しているのは3人で、他の5人は小学校や幼稚園の教諭免許も取得している。

表16 コース別資格取得状況（主要資格）

2006年度生	小	幼	小幼	幼保	小幼保	小小	幼心	小幼心	心	無取得	計
幼児教育	0	6	2	58	18	0	0	0	0	1	85
小学校	17	0	81	0	0	0	0	0	0	0	98
心理学	0	0	0	0	0	3	1	1	3	0	8
編入	6	1	5	0	0	0	0	0	0	1	13
計	23	7	88	58	18	3	1	1	3	2	204

小:小学校、幼:幼稚園、保:保育士、心:心理士

上記の主な資格の他に、学校図書館司書教諭、図書館司書、日本語教員、社会教育主事（補）、レクリエーション・インストラクターの資格が取得可能である。取得状況は表15の通りである。主要資格以外を取得している割合は、幼児教育コースでは22%，小学校コースでは67%，心理学コースでは38%，そして編入生では47%となっている。すべての資格について無資格卒業者は幼児教育コースの1人だけであった。

表17 コース別資格取得状況（その他の資格）

2006年度生	学	司	学司	レ	学レ	司レ	学司レ	社レ	無取得	計
幼児教育	0	3	1	14	0	1	0	0	66	85
小学校	30	6	10	3	15	0	2	0	32	98
心理学	0	2	0	0	0	0	0	1	5	8
編入	8	0	0	0	0	0	0	0	5	13
計	38	11	11	17	15	1	2	1	108	204

学:学校図書館司書教諭、司:司書、社:社会教育主事、レ:レクリエーション・インストラクター

### 3.6 退学数

私立大学の退学者数に対する日本私立大学協会の調査（2006年）によると、年間3%の退学率で、卒業までの4年間では約10%が退学しているという結果である。学部系統別に見ると教育学系では1.0%となっている。したがって、4年間では4%が退学していることになる。退学率が平均よりかなり小さいのは、教員免許取得という学生の目的意識が強いことが要因と考えられる。

そこで、本学教育学科の退学率を過去20年に遡ってまとめて本学科の実情の把握を試みた（表18と図16）。ただし、H19・H20・H21年度生についてはH22.3.31現在でのデータであるので、卒業までに数が増える可能性を含んでいる。表18によるとH4（1990）・H9・H11・H12・H13・H15・H16年度生において平均より多い退学率を示している。図16にも見られるように、H11～H15の間の退学率がかなり高い。この点については検証を要すると思われる。

表18 入学年度別退学率

入学年度	在学数(含編入)	退学数	退学率
H2	215	7	3.3%
H3	267	9	3.4%
H4	298	16	5.4%
H5	258	10	3.9%
H6	273	4	1.5%
H7	211	4	1.9%
H8	223	9	4.0%
H9	211	10	4.7%
H10	216	6	2.8%
H11	220	17	7.7%
H12	216	21	9.7%
H13	275	19	6.9%
H14	278	11	4.0%
H15	239	16	6.7%
H16	230	11	4.8%
H17	230	8	3.5%
H18	207	2	1.0%
H19	220	8	3.6%
H20	213	4	1.9%
H21	229	1	0.4%

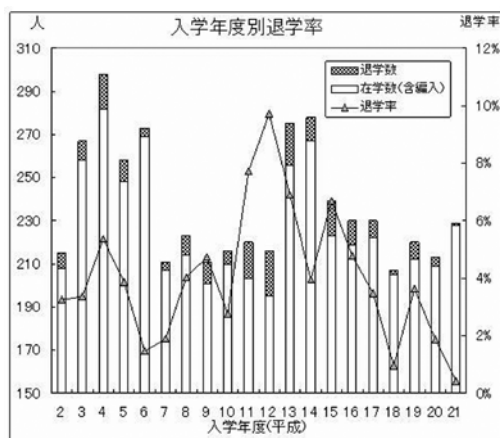


図16 入学年度別退学率

#### 4 まとめ

学生の入試区分・コースと学内成績の相関を主に、教育学科の動向を検討した。特に注目されることは次の点である。

「入試区分とコース選択」について

- 指定校推薦入学生の幼児教育コース選択は減少し、小学校コースの選択が増加している。
- 推薦入試入学生は50%強が幼児教育コースで、小学校コースは40%、心理学コースは10%弱程度の選択である。
- 一般入試入学生は2007年度までは60%が小学校コース、35%が幼児教育、5%が心理学コースを選択しているが、2008年度から小学校コースが減少し、その減少分が幼児教育と心理学コースに半々の割合で移っている。

2008年度からの小学校コースの減少は明らかに近隣大学の同系統学科新設による影響を受けたものであろう。この傾向が今後も続くことは必至である。しかし、幼児教育コースでは保育士資格80名と

いう縛りがある限り、これ以上幼児教育コースを希望する学生が増えるようなことになると、教育効果の低下や学生の不満を招く恐れがある。そのためには出来るだけ推薦入試による入学数を抑え、一般入試の入学生を増やして小学校コースを希望する学生数を維持する必要があるだろう。

「入試区分と学内成績の関係」については平均値の差の検定から次のようなことが言える。

- 一般入試入学生と推薦入試入学生の学内成績を比べると、2007～2009年度生については一般入試入学生の方が順位が高い範囲に分布し、中央値もはっきりとした差が見られ、およそ99%の確率で平均値に差がある。

「コースと学内成績」について

- 小学校と幼児教育コースでは、2007年度は小学校コースの方が順位が高い学生が多いが、他の年度はほとんど同じ分布を示している。
- 心理学コースでは、2006～2008年度は他の2コースと比べると順位が低い方に分布しているが、2009年度は図12でも明らかなように幅広く分布している。これは所属学生数が22名に増えたためであり、今後の増加傾向を示すものかどうか注目したい。

「コース別学年毎の履修状況」について

- 2006年度生に比べると2007年度生以降の履修科目数が減少している。1回前後期には大きな差はないが、2回生からの履修数減が目につく。3回後期の時点で編入生を除いた取得単位数平均は2006年度生が143.0で、2007年度生は134.5単位と8.5単位も少ない。この期間で特に大きなカリキュラム変更はなかったので、学生の学習意欲の差を反映していると考えられる。オリエンテーションや個人面談での学生指導に留意すべき点である。
- 学年進行と履修科目数については、3回後期から少なくなり、4回生になると週に5科目程度で、特に小学校コースの4回後期は卒業論文を含めても2.7科目しかない。週5科目なら2日の登校で済んでしまうことになり、教員採用試験の受験勉強や就職活動に時間を充てていることであろうが、その効果が上がるように学科としての教採支援対策を考えてもよいのではないだろうか。しかし、もしこの時間がアルバイトに費やされているだけということであれば問題である。
- コース間でみると、2006年度生の受講科目数の平均は小学校・幼児教育はほぼ同じであるが、心理学コースは10科目も少ない。これはコースの8名中3名が小・幼の免許を取らず心理士だけの資格取得を選択したためであろう。
- 編入生の科目数は、4回後期以外は他の学生より週2～4科目多い状況である。

教採合格者と入試区分・学内成績の相関については

- 一般入試による入学生の方が小学校コースをより多く選択する傾向がある。
- 小学校・幼稚園の教員採用試験の合格率は入試区分による顕著な差はない
- 小学校合格者の50%は学内成績が60位以内であり、合格者の70～80%は学内成績が100位以内である。
- 幼稚園の合格状況と学内成績の相関は小さい。



「資格取得状況」について

- 保育士課程の5%が保育士資格を取得していない。一方、保育士課程に属する学生のうちほぼ4人に1人は小・幼・保の3資格を取得している。これは当初の想定を上回る数であり、今後の教育また学生募集の面で対応を検討すべきである。
- 小学校コースでは全員が小学校教諭免許を取得しており、80%以上が幼稚園教諭免許も取得している。
- 心理学コースでは8人中3人が認定心理士資格だけの取得という点は他の2コースと比べると問題とすべきであろう。

「退学数」について

- 私立大学教育学系の卒業までの中退平均は4%であるが、過去20年のうち7年が平均を上回っており、3年がほぼ平均と同じ、10年は平均以下という状況であった。全体としては「良」の評価が得られよう。H11～H15の間の退学率がかなり高いのは、この間の日本経済が未曾有の大不況に見舞われた時期であり、経済上の問題が主因となっているのであろう。

## 5. おわりに

教育学科においては「小学校教育コース」と「幼児教育コース」が両輪であるが、80名という保育士課程の人数制限がある以上、幼児教育コースの人数は抑えざるを得ない。しかし、今回の調査で後者を志望する学生の比率が増える傾向が見られ、特に2009年度入学生からの変化は顕著である。このままこれまでの入学数を維持すると、多くの学生に希望するコースが選択できない事態が予測される。対応策としては、入学数を抑えることと一般入試の合格数比率を高くすることが必要と考えられる結果が示された。

## 参考文献

- 1) 神戸女子大学における入試方式と学内成績の相関について：小松俊朗，2006年，神戸女子大学文学部紀要第39号 pp73-90
- 2) 深刻化する退学者問題：船戸 高樹  
<http://www.shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0288.html#contents> 2007.7.4（2010年10月30日）